

用途広がるハニカム成形材



大松利幸社長

新興国からの製品も急増し、厳しい価格競争に晒される日本の樹脂成形メーカーは今、大きな転換点に立っている。付加価値をアピールできる企業しか生き残れない。岐阜市発祥の有力企業、岐阜プラスチック工業は、「新技術による経営革新」を旗印にプラ成形の世界で果敢な挑戦を続ける一社である。

新技術でまず思い浮か

岐阜プラスチック工業

ぶのが樹脂の高強度と超軽量の両立を実現したハニカム構造の次世代成形材「TECCELL（テクセル）」(商品名)である。

「成形材内部が蜂の巣状の空隙構造になっているのが最大の特徴。専用工場を建設し、すでに物流向けパレットなどの用途で採用が始まっているが、さらにエコカーの内装や吸音向け建材の分野への展開も見込める。来期が楽しみだ。水面上で交渉している案件が少なくなく、今はこれ以上

お話できないのが残念だ。こうコメントする大松利幸社長の顔がほころんだ。

新技術の取り組みは、子会社の食品容器成形会社、リスパックでも成果が出始めている。その一つが、白磁器そっくりの外観をプラスチックで実現した「Pure White（ピュアホワイト）」(商品名)だ。一見すると、間違いなく真っ白な陶器。だけど、触ってみてください」と手渡されて驚いた。この軽さは、

まさにプラ容器なのである。この「軽さ」は感動ものである。展示会にも出展したが皆さん驚かれる。スーパーなどで販売する惣菜向けとして拡販したい(大松社長)。重厚な塗りを施したお重と見まがう「響庵(きょうあん)」(同)シリーズなども製品化しており、こうした高機能食品容器の開発コンセプトは「進化へのあくなき挑戦」。新技術で新たな地平を切り開く岐阜プラのチャレンジは来期も続く。

磁器そっくりのプラ容器も